

昼の部 13:30～

【立地適正化計画について（資料1）】

- 住んでいるところをコンパクトにしていくと、郊外の獣害等、連絡体制が脆弱になるように感じるが、どのように対応するのか？
 - 農家や林業の方は郊外に住むままの形になると思うので、それは郊外の居住もある程度維持されるのではないかと考えている。
- 郊外農地は農地なりに維持していく必要性は同感する。動物とかも共存するまちづくりにしてければ望ましい。
 - 貴重な意見として受け取る。

【新駅周辺整備について（資料2）】

- 新駅から市街地・噴火湾 PP に人をどのように誘導していくか、具体的な計画はあるか？ PP 周辺の方に話を聞いたりしたか？
 - まだ具体的な計画はないが、二次交通は重要と考えている。

【意見交換】

- 町長：忌憚のないご意見を。12年後となるとだいぶ将来の話だが、変化のタイミングになる。
- 規制とあるが、景観のための規制とはどんなものがあるか。
- 新駅周辺、農地を守る、最大活用するという方向性の中で、交通網について、福祉の面等でシャトルバス等うまく活用していくのが良いと思う。福祉のまちとして町外からも高齢者も集まっていくようなまちづくりが良いのではないかと。ここなら住んでも良いなと思う人を呼び込むことが重要。観光も期待はしたいが、どっと人が来るわけではない。
- 働き手がない。町長の言う、札幌との連携の考え方、それを基盤とした人を育てるまちと言う考え方は同意。
- 新八雲駅は通過駅になってしまう。整備は財政的に大変な話。（町の持ち出しはほとんどない⇒安心）
- 八雲町に新幹線駅をよくぞ誘致していただきました。町民としてうれしく思います。
- 福祉の面で、人に優しいまちづくりとして、バリアフリーに配慮してほしい。八雲町イベント（山車）をうまく活用してほしい。
- 牧歌的風景について、他の事例がないのであれば、本当に良いと思う。メディアにも取り上げられやすいと思う。
- 福祉関係も高齢化、人材難。資格取得など、町の支援等の協力があれば、まちとして持続性が保てると思う。
- 新駅 2030 年だが、在来線は町としてどういう考えなのか？
 - 在来線は、JR 北海道は運営しない。（町長）個人の考えだが、特急は新幹線に変わるだろうが、普通は、利用者も減って、バスへの転換のほうが良いのではないかと考えている。
- 八雲から新幹線で札幌・函館に行くことができればよいことだと思う。ただし、逆に八雲高校をどうして行くか？
 - あと 5 年で 100 周年。高校はやはり残して生きたい。札幌や函館から来るということも少しはあると思う。八雲らしい人材育成の方法があると思っている。
- 居住誘導、八雲町は雪が多いが、融雪口の設置は考えているか？
 - 融雪口があればよいが、高齢化の中、個人個人の作業が増えるし、除雪回数が減ってしまうことも懸念される。
- 八雲駅の在来線、北海道は食料基地として、貨物列車は残していかなばならない。本州の人も困っていくし、北海道の農業が、単価上昇して成り立たなくなってしまう。旅客は、採算性の観点から廃線という道は避けられないと思うが、そこは維持していく必要があると思う。

夜の部 18:30～

【立地適正化計画について（資料1）】

- 特になし。

【新駅周辺整備について（資料2）】

- 特になし。

【意見交換】

- どの新幹線駅もつまらない印象。バスとの接続も悪い。どのように考えていか？
 - 循環バス等、市街地が離れていたとしても3 kmなので、可能かと考えている。
- 札幌～八雲の往復、新幹線が高ければ、やはり車などを利用すると思うが、どのようにするのか？
 - 町の助成というもひとつの方法として考えている。
- 中心市街地との交通はどのような予定があるのか？
 - 循環がいいのか、デマンドがいいのか、検討中だが、新幹線が来る前に確立したい。
- 新駅までのアクセス道路沿いのインフラ（水道等）はどうする予定か？
 - 住宅地は拡大したくない。大きい施設ができるのであれば話が変わるが、基本的には浄化槽等での対応としたい。
- 札幌・函館までの距離感が縮まれば、八雲に住みながら親の面倒も見られる。本当に良い。そのための良好な居住環境の維持が重要。病院もあるし、その環境を維持していく必要がある。
- なんで牛ばかり？水産の話はないのか？
- 遊楽部川を利用して、鮭の孵化場など、うまく見せられないか。遊歩道なども整備して。
- ワイン工場と牛乳工場、実現性はどのくらいあるのでしょうか？
 - ワイン工場は、ワインで儲ける訳ではなく、それと付随する食品で儲けたい。牛乳工場は、ピーク時の生乳量になれば可能性があると思っている。
- 牧歌的なものが、行く末で荒地に変わらないか、大丈夫か？
 - 持続可能なまちの経営としていくため、人材育成の仕組みを同時に考えていく必要がある。先日、熊石の研究所の地域おこし協力隊に12名も募集してきた。

